



死を見つめる心

ガンとたたかった十年間 岸本英夫



講談社版

ガンとたたかった十年間

死を見つめる心

定価 340円

昭和 39 年 8 月 20 日

第 1 刷発行

著 者 ^{きし}岸 ^{もと}本 ^{ひで}英 ^お夫
発行者 野 間 省 一
印刷所 本文・KK常磐印刷所
表紙・吉田紙器印刷KK
製本所 藤 沢 製 本 K K

発 行 所 株 式 講 談 社
会 社
東京都文京区音羽町 3-19
電話 東京 (942) 1111
振替口座 東京 3930

© 岸本三世 1964

検印廃止

死を見つめる心

ガンとたたかった十年間

岸 本 英 夫

講 談 社

装帧：稻垣行一郎

序にかえて

指折りかぞえてみると、すでに四十年をこえるのであるが、彼とわたしは、おなじ東大の文学部で宗教学を専攻する学生として交わりをもった。さきに声をかけたのはわたしだったというのが、彼の記憶するところであった。それ以来、ずっとおなじ道を歩いてきたのであるから、ずいぶんとながいあいだのつきあいである。そのながいつきあいのなかでも、最後のほぼ十年にわたる彼の生き方は、わたしにとって、まことに印象のふかい、感銘のふかいものであった。

ほぼ十年というのは、彼がガンを得てからのことである。その当時のことと、それに対処するために、いかに苦しみ、いかなる心組みを築いていったかは、本文のいくつかが、あますところなく語っているのであるから、もはや、わたしのいうべきところはない。ただ、わたしのいいたいことは、その間における彼の人間としての、おどろくほどの成長に

ついでである。いや、それは、成長というような平板なことばでは、とうていいい表わしがたいものであった。パウロの書簡のなかに、「古きは既に過ぎ去り、視よ、新しくなりたり」という句があったことを、わたしは憶えているが、それは、そのような変貌であったといっても、けっしていい過ぎではなかった。

わたしどもは、おたがい、宗教の学をやってきたのであるから、人間が死と対面することによって、ひるがえって、生を充実してゆくという生き方のあることを知っている。おそらくは、宗教的な生き方というものの極意は、その辺りに存するものであらうと思われる。道元禪師は、「志のいたらざるは、無常をおもはざるなり」といった。一遍上人の生き方は、「臨命終時」であったと聞いている。命終の時にのぞんだ心ばえで日々を生きるということである。ハイデッガーの『存在と時間』には、「死を手もとにかきよせて生きる」という意味のことばがあったことを、興味ふかく記憶している。だが、わたしどもは、ただ知っているだけであって、なかなか、それが生活の力となって実現するにいたらないのである。

しかるに、はからずも、ガンを得て、常時死と対面してあらねばならぬ状況下におかれた彼のそれからの生き方は、まったく刮目^{かふく}して見るに値するものであった。彼はけっして

くずおれなかった。冷静に死を見詰めながら、毅然として、また猛然として生きはじめた。その生き方は、じつに見事であった。人が変わったような立派な生き方であった。それ以前だって、すぐれた学者として、立派に生きてきたのであるが、いまや、その生き方には、あきらかに質的な変化があった。死と対面することによって生を充実するという、その生き方が、それからの彼の生き方であったからである。

一つの恥ずかしい思い出を書いておかねばならない。ある日、わたしは、彼とならんで自動車のなかに坐していた。なにに關してであったか、その前後のことは、まったく忘れてしまったが、「一大事とは、今日只今のことなり」という、あのことをわたしは**つゞ**呟いた。隣りの席にいた彼が、「うん、それなんだ」と応じた。あとで氣がついて、わたしは恥ずかしかった。なんとなれば、わたしはただ他人のことばを語っただけであるのに、彼はそれを、そのころの日々の生き方のなかで生きているのだと知ったからである。

その生き方のなかで、もっとも特色のあった点は、幻想に酔うことがなかった、もしくは、酔うことができなかったという点であろう。また、不合理をにくむことは、はやい時期から、彼の生活態度の基石をなしていた。それらの点で、彼は、うたがいもなく、現代人であった。そして、そのうえに、現代人の新しい宗教的な生き方を、ゆるぎなく確立す

るといふのが、彼の宗教の学のねらいであつたが、はからずも、ガンを得て以後の、最後の十年にわたる彼の生き方は、それを、身をもつて実現したものであつた。その意味において、彼は、一つの新しい宗教的な生き方の範例をのこしたのである。

だが、彼はついに逝^ゆいた。一九六四年一月二十五日、ついにガンとの闘いにやぶれて死んだ。その送葬にあたつては、密葬において、本文のなかの「別れのとき」からの抜萃が朗読せられ、また、本葬においては、「わが生死観」の別刷が会葬者に配布せられた。それらを通して、彼ののこした新しい宗教的な生き方の範例は、すでに、おおくの人々に感銘を与え、また、今後も、さらにひろい影響をもたらすであらう。

目次

I 死に出逢う心がまえ……………九

わが生死観

別れるとき

私の心の宗教

II 癌とのたたかい……………一七

アメリカで癌とたたかう

癌の再発とたたかいつつ

命ある限りゆたかに

Ⅲ 現代人の生死観……………二五

生死観四態

死

現代人の生死観

人間と宗教

序にかえて……………増谷文雄

あとがき……………高木きよ子

岸本三世

I
死に出逢う心がまえ



わが生死観

——生命飢餓状態に身をおいて——

二つの立場

生死観を語る場合には、二つの立場がある。第一の場合は生死観を語るにあたって、自分自身にとっての問題はしばらく別として、人間一般の死の問題について考えようとする立場である。これは、いわば、一般的かつ観念的な生死観である。もちろん、自分も人間であるから、自分というものも、広い意味では、その中にはいつている。このような生死観も有用である。自分も含めた意味での人間の生死観の考え方を整理しておくことは、いざという場合の基礎的な知識となるからである。

わが生死観
しかし、もっと切実な緊迫したもう一つの立場がある。それは、自分自身の心が、生命飢餓状態におかれている場合の生死観である。腹の底から突きあげてくるような生命に対

する執着や、心臓をまで凍らせてしまうかと思われる死の脅威におびやかされて、いてもたってもいられない状態におかれた場合の生死観である。ギリギリの死の巖頭にたつて、必死でつかもうとする自分の生死観である。

この第二の立場の場合には、第一の立場には含まれなかったもう一つのはげしい要素を加えている。それは、人間が健康で生命に対する自信にみちて、平安に日々の生活を営んでいる場合には、まったく、思いもかけない要素である。人間が、生命飢餓状態におかれた場合に現われてくる生命欲のはげしさである。生命欲は、生理心理的な一つの力である。いつでも人間の心の底に潜んでいるに相違ない。しかし、人間は、平生はそれをそのままでは感じない。それがいざとなると、猛然と、その頭をもたげて来る。そして、はげしい生への執着となり、死に対する恐怖となって現われる。この要素を加えると、人間の生死観は、何か質的にも別個のものになったかと思われるほど、第一の観念的な立場とは、ことなってくる。

人間が生命飢餓状態に陥るのは、戦場に赴くとか、病気になるとか、自分の生存が続けてゆく見通しが断ちきられる場合に限る。それも目前の近い将来である場合に限る。生命の危険の場合におかれても、それを超えて生き続ける望みのある場合には、人間はその希

望の方に重点をおいて、それを頼りにするので、生命飢餓感とは、本格的には起ってこない。それが起ってくるのには、生存の見通しが絶望にならなければならない。死刑囚の刑が最終的に決定するとか、神風特攻に出かけてゆく日がきまるとか、癌で手遅れを宣告されるとかいうような場合である。死が目の前に迫り、もはやまったく絶望という意識が心を占有したときに、にわかに、心は生命飢餓状態になる。そして生命に対する執着、死に対する恐怖が、筆舌を超えたすさまじさで、心の中に起ってくる。このように生命飢餓状態というものは、生存の見通しに対する絶望がなければおこってこないというところに、大きな特徴がある。

生命飢餓感とは、食物に対する生理的な飢餓感に酷似している。胃袋に食物が満ちている時には、飢餓感を感じない。もちろん、人間は、満腹していても、食欲について語ることができる。しかし、その場合の食欲は、食物の味のよいわるいというようなことに関連してくるに過ぎない。痛烈な飢餓感ではない。ところが胃袋に食物のない状態の人は、もつとほんとうに腹の減った苦しみに、なやまされている。それは、単に、観念的においしい食物のことを考えただけでは、けっして、いやされることのないものである。生命の飢餓感も、それと、まさに、同じである。明日も、あさっても、そしていつまでも生きてゆく

ことができると考えている人の心は、生命に満ちたりている。生命に対して飢餓は感じていない。それゆえ、そのような人は、観念的には、死の問題を考えても、生命飢餓状態におけるようなげしい生命欲にさいなまされてはいないのである。

生命飢餓状態におかれた人間が、ワナワナしそうな膝がしらを抑えて、一生懸命に頑張りながら、観念的な生死観に求めるものは何であるか。何か、この直接的なげしい死の脅威の攻勢に対して、抵抗するための力になるようなものがありはしないかということである。それに役立たないような考え方や観念の組立ては、すべて、無用の長物である。

生命の飢餓状態におかれて

私自身も、はじめから、そのような生命飢餓感を知っていたわけではない。外国の病院で、外国人の医者から、はからずも面と向かって癌の宣告をされたときに、それははじまった。

「あなたの病気は悪性腫瘍です。医者としてはあなたの生命を、半年までは保証することができます」